

島より米澤山形を経て奥羽北線に合せんとする奥羽南線名古屋八王子間及篠ノ井鹽尻間を連絡せんとするところの中央線、さては北海道の官設鐵道等とついで申上げますれば限りもありませんから、これは他日申上げることとしてこゝには御預りにいたしておきます。

次に私設鐵道は日本鐵道會社が十七年六月二十五日上野高崎間を開業しましたのを始めといたしまして阪堺、兩毛、伊豫、甲武、水戸、大阪、讃岐、北海道炭礦、關西、山陽、九州等四十有餘の私設鐵道會社が出来まして今日では線路の延長四千哩に達しました、泰平の御代とはいひながら、誠に盛大なることであります、今日では尙以て足れりとせず、鐵道の發達頗る遅緩なりとて多年帝國議會にはいろいろと名論が出ます位ですが三十年前

を願みれば、激しく反對せられて之を敷設するものは賣國奴など、まで痛罵せられたところの鐵道であります、思想の變化といふものは實に甚しいものであります (未完)

夢のはなし (承前)

東 基 吉

夢は畢竟、不隨意的の想像作用である、別に自分からは想像しようと思はないで居て、併も寢て居る中に種々な想像が起るのである、吾人の心が活動いて居る有様を稱して、心理學の上では、意識的狀態、といふが、夢は尙心が活動して居るのであるから、夢の間吾々の心は、尙意識狀態にありといはねばならぬ、併しながら通例目醒めて居る時の意識狀態と違ふと云ふ點は、夢中の

意識生活は、丸で發狂者の様な有様で、殆んど統一がないといふ事、言ひ換へれば夢に於ては、吾々の理性は全く力を失つて居る事である、取止もない、とても通例覺めて居る時分に考へることの出來相にもない、實行の出來相にもない事などが夢の時には譯もなく考へられ、譯もなく實行せられるといふのは、畢竟此譯である。だからして夢の中で考へた事や、した事には決して道德上の罪を負はせる譯には行かないのである。夫から今一つの覺醒の時の意識状態と違ふ點は夢の中の想像は

頗る活潑明瞭である。

例令ば同じく、死んだ人を想像するにしても、醒めて居る時には、十分明瞭に其面影を心中に顯はすことが六ヶしいけれども、夢になると、丸で實際目のあたり其人に

遭つて居る様に、あり／＼と顯はれる、其他のこども夢の考は至極明瞭に浮んで來る、この點が余程、普通の想像とは違ふ點である、夫に付いて面白い話がある。

ある處に一人の畫工が居つたが、頗る畫道に熱心な所から、種々に苦心經營して畫に従事したがいづも満足なものが出來ないで、不満で／＼寢て仕舞ふのが常であつた。所がある朝、目が醒めて見ると自分の机の上に、一枚の繪が實に見事に立派に出來て居る、とても自分のなどか側へもより付く事が出來ない程甘く出來て居る。はて誰が畫いて置いて行つたんだらうかと、さま／＼考へて見たが、想像がつかない、所が、不思議な事には夫からといふもの、誰が畫いたとなしに毎朝立派な畫が出來上つて居るので、たう／＼不思議な友

達に打ち明けた、所が、其友達は、よし／＼今度は僕が一つ考へてやらうといふので、其晩其友達がそつと、畫工の寢所へ這入つて、見張つて居つた、さて夜中になるといふと、どうでせう、今まで眠つて居つたと見た其畫工が忽然起き上つて、机の前に端座して、筆を洗ふやら繪具を解くやら、大騒ぎを始めて、さて静かに一生懸命に書き始めた。一心に精神を込めて丸で側目も振らないでせつせと書いて、さて夜明頃になると仕舞つて寢床に這入る、そこで、此不思議がやつと判然した。明くる朝になると、又立派な繪が出来て居るので畫工は又一方ならず驚いた。自分で書いて自分で吃驚してゐるのである。そこで其眞相を見届けた友達が、夫を咄したのだが、始めは先生容易に信じなかつたといふ事である。

つまり、醒めて居る時には、吾々の心の中は、種々他の考が交つて来て、精神が専らにならぬことが多い考を一に集めて想像する事が六ヶ敷い。だから、醒めて居る時には、極判然と想像を浮ひ出させる事が六ヶ敷いのであるが、夢の際には、或一の事に想像が向ふ時は、他の考といふものが一つも心中に浮み出ないで、皆鎮まつて寢て居る、そうして其一つの事だけが力を専らにして、活動するのであるから、夢中の考といふものが、判然顯はれる譯で、又夢中に出来た彼の畫工の畫も、精神が他に妨げられない所から、見事立派に出来た譯である。

夢に付いては、尙記すべき事が澤山あるけれども、一先づ之で完結する事にする、之に付いて至極興味深いことは、夢の日記を書くことである

毎朝起るとすとす、昨夜の夢を考へ出して夢の日記帳に記録して置く。そして一年も経つてから、それをくり擴げて見ると、極めて面白い。併し普通の日記と引き合はせて見れば一層面白からうと考へる。

(をばり)

さみだれの

雲間の月も影ふけて

露けき庭に

さぶ整かな



史傳

津崎矩子

下村三四吉

井伊直弼が大老の職に就きしより、内治の事といひ、外交の事といひ、共に尊攘黨の志士の企望に反せることのみ斷行せられしかば、幕府非難の聲大に高まり、直弼は之を鎮壓せんことを圖り、衝突の機既に發せることは、前述の如し。この頃水戸の士に日下部伊三次といふものあり。水戸邸の留守居鶴飼吉左衛門、京都成就院の僧月照及びその他の諸有志に結び、三條近衛等の諸公卿に謀り、水戸に勅命を下し、以て幕府の政事を改革せ